間諜 二葉亭四迷

西木正明

Masaaki Nishiki

間諜 二葉亭四迷
西木正明
© Masaaki Nishiki 1997

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1997年5月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——信毎書籍印刷株式会社
印刷——信毎書籍印刷株式会社
製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263557-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

間諜二葉亭四迷

西木正明

講談社

江苏工业学院图书馆
藏书章

目次

プロローグ　7
第一章　東京　17
第二章　ウラジオストック　61
第三章　ハルビン　115
第四章　北京　187
第五章　東京　213
第六章　樺太　249
第七章　東京　283
第八章　ヨーロッパ　319
第九章　いずこへ　337
エピローグ　363
あとがき　369
解説　清原康正　375

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

間諜 二葉亭四迷

プロローグ

《一八八一年三月一日午後二時すぎ。小雪がぱらつく鉛色の空の下、ロシア皇帝アレクサンドル二世は、観閲式を終えて居城の冬宮に向かっていた。皇帝を乗せた馬車が、ペテルブルグの中心を流れるキャサリン運河にさしかかった時、沿道を埋めた群衆の中から、雪つぶてのように白く塗られた爆弾が馬車に投げつけられた。

馬車は大破し、護衛のコサック兵と通行人数名が死亡、御者(ぎょしゃ)が大怪我(おおけが)をした。アレクサンドル二世は奇蹟的にまったく無傷で、血に染まって路上に倒れている御者を助け起こすべく、馬車から降りた。そして、御者に近寄りながら、

「神よ、お恵みにより、余はまだこうして生きている。その大いなる御心をもって、あわれなる御者を救いたまえ」

とつぶやいた時、群衆の中からひとりの若い女が彼に近寄り、股の間に爆弾を投げつけた。爆発により、アレクサンドル二世の両足は、胴から離れて群衆の中に吹き飛んだ。

暗殺された父の跡を、三十六歳のアレクサンドル三世が継いだ。

アレクサンドル三世は、父が暗殺されたのは、民衆を不必要に甘やかしたからだと考えた。即位後彼が最初にやったことは、内務大臣プレーベに命じて、悪名高い秘密警察アフラナを強化することであった。

アフラナは、アフランヌィエ・アッジェレーニャ（特別公安警察）の略称である。

アフラナは、皇帝暗殺を実行したテロリストグループの背後にはユダヤ人がいると考え、後にヒトラーがユダヤ人弾圧の口実に用いたユダヤ議定書（シオン・プロトコル）を偽造して、ユダヤ人を圧迫した。

これに対してユダヤ人を中心とする革命組織・社会主義革命党は、皇帝暗殺部隊『人民意志委員会』を組織、徹底抗戦のかまえをとった。

この組織のリーダーは、ユダヤ系ロシア人のエブノ・アゼブで、爆弾などを製造する化学班の指揮者は、アレクサンドル・ウリヤーノフであった。アレクサンドル・ウリヤーノフは一八六六年生まれで、大学ではミミズの研究を行っているおとなしい学生だったが、エブノ・アゼブらのオルグによってマルクス主義に目覚め、皇帝暗殺班の一員になった。

彼らは弾圧政策をとり続けるアレクサンドル三世を一刻も早く抹殺することを目的に、着着と準備を進めていた。

しかるにアレクサンドル三世は、父アレクサンドル二世の両足をもぎ取られた凄惨な遺体

を見ているだけに、警戒心がきわめて旺盛だった。

だから、父皇帝のような不用心な行動はとらず、テロリストに攻撃の隙を与えなかった。

そのいっぽうで、社会主義革命党内部に大量のスパイを送りこみ、彼らの動静をさぐることを忘れなかった。

彼の用心深さが功を奏し、一八八七年三月、密告により暗殺計画が発覚した。首謀者のウリャーノフ以下数十名の学生や若者が、三月十三日から二十二日までの間に、ことごとく逮捕された。

主犯格のウリャーノフ以下五名が死刑、共犯者の総勢約五十人がシベリア流刑などの判決を受けた。

ウリャーノフには、ウラジミールという四歳下の弟がいた。ウラジミールは、後にレーニンと名乗って、兄の無念をはらすことになる。

流刑になった者たちが送られたのは、樺太を含む東シベリアの流刑地であった。これらの流刑は、当初一種の植民政策としてはじめられた。十七世紀なかば、アムール川下流域を探検したロシア人の一部が、樺太北部まで足をのばし、そこで良質の炭田を発見したことが、植民を意図するきっかけとなった。

当時の樺太は、北部はニブヒ人（ギリヤーク）とウィルタ人（オロッコ）、南部はアイヌ人が支配し、南と北の住みわけが出来ていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところが十八世紀に入って、南から日本人、北からロシア人が入って来るにおよんで状況が一変した。日露両国ともそれぞれに樺太全域の領有を主張、一時は日露両国人とニブヒやウィルタ、アイヌなどの先住民族が雑居する無国籍地のような状態となった。

当然、紛争が続発する。先住民族にとっては迷惑この上ない話であるが、日露両国とも引き下がる気配がない。

すったもんだのあげく、ようやく一八七五年に至って日露両国の間に『樺太千島交換条約』が締結され、ロシアが樺太全域を支配し、見返りとして日本が千島列島全島を領有することで決着を見た。かくて帝政ロシアは、だれに気兼ねすることなしに樺太への植民が可能になった。

当時樺太の資源開発を声高に主張した人物がいる。函館(はこだて)駐在領事ビュッオフである。彼は樺太で採掘した石炭を、いったん函館に貯蔵し、太平洋方面で活動するロシア商船隊や艦隊の燃料として活用すべきであるとした。この主張の裏には、時いたらば北海道をも支配下に収めようとした帝政ロシアの思惑が見え隠れしている。

ビュッオフの主張の一部が通り、ロシアは政治犯を含む囚人を、炭鉱開発と農地開拓のため大挙して樺太に送り込みはじめた。

一八八一年、樺太に監獄が新設され、囚人の収容能力が飛躍的に高まった。以後、毎年五百人から六百人の囚人があらたに送られて来ることになる。

この結果、十九世紀末の一八九八年になると、樺太の流刑囚の総数は、七千八十人に達した。内訳は男六千三百六十六人、女七百十四人。これらの人々は流刑罪人と呼ばれた。

このほかに、流刑植民、流刑農民と呼ばれる人々が一万五千人以上いた。

流刑罪人、流刑植民、流刑農民の区別は次のとおりである。

流刑罪人＝目下服役中で、収監中の者とそうでない者とに分れる。たとえば十五年の刑期で樺太に送られてきた流刑囚は、当初の四年間、鉄の足枷（あしかせ）をはめられ、毛髪を半分剃（そ）られて、一目で囚人とわかるようにされていた。

この間の品行が方正で、改悛（かいしゅん）の情がいちじるしいと判断されると、足枷をはずされて一定の地域内での行動の自由が認められるようになる。自分で家を持ち、妻帯することも許される。

この期間を無事乗り切ると、流刑罪人から流刑植民に昇格する。

流刑植民＝植民用の村落に自由に居住し、農業や採炭に従事する。

流刑農民＝流刑植民よりさらに自由の幅が広がり、ペテルブルグ、モスクワの二大都市以外なら好きな所に居住出来る。

当時の状況から、樺太開発にあたったのはおもに流刑植民の人々であったと推測される。ちなみに一八九八年における流刑植民の数は、村落の数八十六、戸数二千八百四十六戸、人口一万三千四百七人であった。流刑植民は、農具、種子、牛馬などが国から貸与されるほ

か、自分の開拓地からの収穫が見込めない初年度には、食糧から衣服までが支給された。》

わたしはメモを取る手を休め、しばらく外の街の音に耳を傾けた。場末といえどもここはニューヨークだ。窓際に置かれた古い木製の机に座って資料を読みながらメモを取っていると、ガラス窓越しに街の喧騒がひっきりなしに聞こえて来る。それはあたかも遠い海鳴りのようでもあり、また、北国の荒野を吹き抜ける地吹雪のようにも聞こえる。

今からおよそ十年前の厳寒二月八日も、同じような音を聞いていた。あの日の午後、わたしは北海道帯広市郊外にある墓地の一角に立っていた。目の前に建つ墓石の足元に、半ば雪に埋まった状態の真新しい花束がある。

わたしはその脇に、持参した小さな花束を置き、手を合わせて拝んだ。

「中山さん、これからあなたのお父さんの人生を、一生懸命追って見ます。どのくらい時間がかかるかわかりませんが、あなたと別れた後、お父さんがどんな人生を歩んだかを把握出来たら、かならず報告に来ます。よけいなことをして、とお怒りかも知れませんが、どうか許してください」

心の中でそう祈った時、ひときわ強い風が吹いて来て、置いたばかりの花束が数メートル吹き飛ばされた。あわてて追いかけてひろいあげ、今度はしっかりと雪に差し込む。

一礼して墓石の前を離れた。墓地を出ると風はいっそう強くなった。広大な畑地を吹き抜

けて来る風は、地面に積もった雪をまいあげて地吹雪となり、視界がまったくきかなくなった。

時折地吹雪が弱まると、遠くに帯広の市街が見えた。わたしはそのはるかな家並をめざして、身体を風にあずけるようにして歩き続けた。寒さはほとんど感じなかった。自らの生い立ちと、まぶたの父についてほとんどなにも語らずに逝った中山マツも、幼いころ北冥の樺太で、同じように地吹雪に逆らって歩いたのだろうか。

そんな彼女にとって、自分の誕生直前、遠くヨーロッパの地に去った父親は、どのような存在だったのだろう？

わたしが中山マツに会ったのは、彼女の死のおよそ一年前のことであった。当時中山マツは、帯広郊外にある老人保護施設『からまつハウス』に身を寄せていた。

彫りの深い細面で、いかにも混血らしい風貌の女性であった。若いときはさぞ美人だったにちがいない。

実のところ、当初わたしの取材リストの中には、中山マツという名前はなかった。取材をはじめたそもそもの目的は、中学生向きのある学習雑誌に、明治の文豪二葉亭四迷の評伝を書くことだったのだ。

ところが、彼の周囲を調べているうちに、話が意外な方向に動きはじめた。まず、日露戦争前夜、日本軍部がロシア語に堪能だった二葉亭を、諜報活動に使った形跡があること。さ

らに、当時ロシアの支配下にあったポーランドの独立をめざす動きが、しだいに高まりつつあったが、その中心にいた何人かと、二葉亭四迷の関わりを示唆する資料が出て来たのだ。

わたしは急いで本来の仕事をかたづけ、あらためてこの問題に取り組んだ。取材を進めるにつれて、驚くべき事実が次々に明らかになって来た。遠く東ヨーロッパの地から極東の果てに流刑になり、現地の娘と恋愛して子供までもうけたひとりの民俗学者。

彼は、二葉亭四迷などの援助を得ながら、祖国ポーランドの独立のため、日本と組んでロシアを裏切った。

そうこうするうちに、その民俗学者の長女が、北海道・帯広郊外の老人ホームに現存しているという情報が飛び込んで来た。わたしはさっそく帯広に飛び、近く七十七歳の喜寿を迎えるという樺太生まれの老女に面会して、彼女の父についてあれこれ質問した。

当初中山マツは、頑強に人違いだと言い張った。自分はたしかに樺太生まれだが、血筋は純粋のアイヌ人で、白人との混血などではないと言って、取材を拒否した。

三回、四回と通っているうちに、さすがに根負けしたのだろう、自分の血筋については前のように頑強に否定しなくなった。そしてようやく、

「うんと昔のことだけど、母が死ぬ前に、父のことを話してくれたことがある。ポーランドという遠い国から来た人で、それはえらい学者だったと……」

ここまで言って、中山マツは急に言葉に詰まり、無骨な指先で鼻の下を擦りながら、

「父についてわたしの知っていることはそれだけだ。だって、父はわたしが生まれる前に国に帰ってしまったもの」

と言って両手で目を覆った。そして、

「えらい人だったかもしれんが、わたしたち母子にとっては、憎らしい人だ。母は、悲しみのあまり泣きすぎて目が見えなくなってしまったのだから」

とつぶやいた。わたしは、目を覆った指の間から、じわりと湧いてきた彼女の涙を、十年余り後の今でも鮮明に思い出すことが出来る。

一週間後、わたしはニューヨークにおけるすべての取材を終了して、通い慣れたユーゼフ・ピウスーツキ研究所の資料室を後にした。

そして、東京西郊の自宅に蟄居してメモと資料の整理を行った後、原稿用紙に向かって一世紀近くにわたる膨大な時空の旅に出発した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com